



龍族

नागा लोक

題字：佐伯隆快

第 4 号

南天会
平成 27 年
8 月 30 日

佐々井秀嶺上人 一時帰国記念特大号

御礼

佐々井秀嶺上人

メッセージ

日本の皆様、殊には南天会会員の皆様、五月二十九日、祖国日本に着いて以来約一ヶ月と十日間という長い間、私如き者に対して真心の籠ったお世話や御供養を賜り、伏して御礼申し上げます。

体力厳しき病み上がりのこの私に、手を引いて下さったり、背中を押して頂いたり時には大変ご迷惑をお掛け致しましたが、偏に皆様の厚い温情を持ちまして、何とか無事に祖国日本の日程を終える事が出来ましたことは、只々感謝至極でございます。本当に有難うございました。

また私にとっては歴史的瞬間でありました、高野山での講演に大正大学での宮崎哲弥先生との対談も完遂出来、お心遣いを賜りました皆様、

また全ての行程に於いて裏方で支えて下さった佐伯隆快様を始めとする南天会世話人の皆様、本当に有難うございました。

インドに戻りましてからは何時もの如く、身体に鞭を打ち、相変わらず緊迫した多数の難題を抱えた活動に忙殺されてはおりますが、お蔭様を持ちまして、元気に日々過ごさせて頂いておりますのでご安心下さい。

今般も本当に皆様には大変お世話になりました。重ねて伏して御礼申し上げます。

そして、遠く南天竺の地より只管皆様方のご多幸ご健康を御祈念申し上げます。

最後にインド仏教徒の為の窓口であるこの南天会を末永くご支援賜りますよう、また会員倍増にご協力ご吹聴願えますよう、伏してお願い申し上げます。

南天龍宮城沙門 天日秀嶺 合掌九拜

同体大悲	佐伯隆快	2
2015年佐々井秀嶺上人 帰国道中記	中村龍海	3
高野山講演	田中秀康	7
信州道中記	宮淵泰存	6
来日特別公開対談 「仏教者の使命と救済」 於 大正大学	山本昌子	8
オレの師匠	黒澤雄太	11
シルブルより。	平野文興	11

第 2 回南天会交流会講演

現代インドを生きる仏教僧 佐々井秀嶺と
仏教徒たちの取り組み

根本達	13
会計報告	18
南天会概況	19
掲載メディア情報	19
本の紹介『夜明けへの道』	19
お知らせ	20

同体大悲

文〓南天会世話人

佐伯隆快

五月二十九日早朝、成田空港第2ターミナルの到着出口、佐々井上人の臙脂色の衣が見えると、出迎えの人々は皆笑顔となりました。あたり前ですが皆嬉しいのです。この度の帰国の打診があつたのは昨年六月末、高野山にアンベードカル博士の銅像が建立されるというニュースを受けて、その除幕式に参加したいという佐々井上人の希望があり、ちょうど南天会も発足に向けて準備をしていた頃でした。ところがその後の体調不良、危篤状態、そして奇跡の復活。まさに今日ここにバンテージの姿を仰ぎ、心から「良かった。」と思つた瞬間でした。

二〇〇九年、四十四年ぶりの帰国の後、もう二度と日本には帰らないと宣言され、しかし東日本大震災の惨状を思い再度の帰国を決意された佐々井上人。以後三度の帰国では必ず東北の被災地を巡礼し、また日本に潜在する様々な問題を深くとらえ、インド仏教徒と同様に故国の人々の心にも密着して思いを同じくする佐々井上人。

今回の行程を南天会でお世話するにあたり、体調を考えつつもできるだけ大勢

の人に直接佐々井上人に接してもらいたいと思ひました。交流会、高野山講演、大正大学での宮崎哲弥氏との対談などでは、本当に最後の一人まで、話を聞いて、握手したり、本にサインしたり、写真を撮ったりしておられました。滞在期間中全部で九本のインタビューを受け、すべて全力でお話しさせていただきました。

佐々井上人は、人の話を聴くとき特徴的な顔をされます。話す相手に真っ直ぐ顔を向け、細い目が黒目がちになり口を少し開けて、首を左右に小さく振りながら、また少し小指が曲がった右手の平を見せて、それがちょうど施無畏の印のようになっています。文章では分かりにくいですが、正に虚心に相手の話を聞く姿とはこんな感じかなと思うような顔です。もちろんこちらがいい加減な話をしている、すぐに怒られたりもしますが、真面目な言葉に対しては、何の障りもなく気持ちに通って行くようです。

インドでもそうですが、滞在中も常に移動の毎日でした。車に乗って日本全国を走り回りました。岡山から新見へ、倉敷、神戸、高野山、そして京都から岡山へ帰り、美作往復、更には岩国、下関、萩。日本海に沿って出雲日御碕。東北巡礼も車で回りました。いつも助手席に乗って街や山、海の風景を眺め、「あれはなんですか。」などと解説を求められ

ます。まるで日本の津々浦々を回ることで、日本と一体となろうとしているのではないかとと思ひました。高野山講演の翌日、山内の名所を案内して歩きまわりましたが、その時バンテージは一人の参拝者という感じで、我々と同じように、同じ方向を向いてお参りをされていました(赤い衣は目立っていました)。そして東北巡礼では、まさに今の苦しみや怒り、悲しみの声を聴き、動物や自然とも一体となって祈りを捧げました。佐々井上人の行動の出発点は、この他人と一体となったところから始まるのでしょうか。同体となって同じ気持ちになって生まれる慈悲の心、同体大悲です。そしてそこから自ら先頭を切って歩き出す、行動に出る。

滞在した四谷のお寺で、受付の人にこんな挨拶をしておられました。「私はイ

ンドから参りました佐々井秀嶺という駆け出し者です。」後ろに従っていた私は「なるほど!」と思ひました。バンテージはすでに駆け出ししている、私は未だ出発さえしていないのかも知れないと、もう付いて行くしかない。ササイ・アゲボロ!

七月七日、成田を発つて無事インドに帰着され、今回の一時帰国は終了となりました。滞在期間中は、南天会関係者、また大勢の人々のご協力、ご援助を頂き、誠に有難うございました。佐々井上人もとても有意義な日本滞在となったと喜んでおられました。またしかし、日本は様々な問題を抱え、その前途は多難であるとも言われています。

私たち南天会は、佐々井上人と同じ道を歩む龍族として、同体の大悲を胸に刻みたいと思ひました。



二〇一五年佐々井秀嶺上人帰国道中記

文 中村龍海

昨年、一時危篤に陥り、生死の境を彷徨った佐々井秀嶺師が不死鳥の如く回復されて、二年ぶりに、五月二十八日―七月七日の日程でご帰国された。西は山口県下関市から東（北）は東日本大震災の被災地にまで及ぶ、日本各地を行脚して回られた。昨年十月にナグプールに押しかけ入門してからありがたいご縁をいただいている私中村も、大半の日程を同行させていただくという僥倖に恵まれたので、私が佐々井師のお側で見聞した範囲で、その道中の顛末を、ここに簡単に記させていただくと思う。

5/29 帰国。成田空港に平野文興師、大勢のお弟子や支援者の方々の出迎え。その足で成田山新勝寺へ参詣し、橋本照稔貫首様を訪問。旧交を温められ、高野山で講演会を行う許可をいただく。

5/30 高尾山薬王院に参拝。ものすごい人出に驚かれたご様子。ケーブルカーで登山用の杖を購入し、日本滞在中のよき伴侶となる。若き日、共にご修行された大山隆玄貫首様方を訪問。同じく高野山講演会の許可をいただく。さきの貫首にして、佐々井上人の師匠に当たられる、故山本秀順ご尊師の墓前にてご報告

の読経。その後、お弟子の宮本龍勝師のお寺である埼玉松伏町の真言宗豊山派無量寿院に参拝。龍勝師のお父様にあたる宮本慶通ご住職様、龍勝師、そのお母様に面会され、「戒名は要らない」とお寺離れをする人々の増加について語り合う。

5/31 四谷の高野山真言宗真成院にて南天会の交流会。かつてのナグプールでのお弟子であり、今も支援を惜しまない小池一郎氏をはじめ、大勢の日本人、在日インド人仏教徒達が集まり、久闊を叙された。夜は、真成院近くの支援者、富樫氏のお店「野武士」にて開かれた交流会の打ち上げに参加され、昨年の危篤の際の臨死体験をお話される。

6/1 午前、朝日新聞社の取材。午後には神保町散策。カフェの名店さぼるるにてアイスコーヒーを召し上がり、糖尿病に効果があることを体感。以降お気に入り飲物となる。誠心堂書店で橋口兼介店主のご案内の中、貴重な古典籍等をご覧になる。新刊書店に佐々井師の新刊『龍樹と龍猛と菩提達磨の源流』が置かれてあり、口述筆記を手伝わせていただいた私も大感激でした。夜は新宿末廣亭にて、南天会会員でもある柳家燕弥師匠の「一

目上がり」の高座を最前列で楽しめる。

6/2 新幹線で岡山へ。坂田龍晴氏や

遠山睦子氏達の出迎えを受ける。真言宗御室派長泉寺に参拝し、宮本光研師、宮本龍門師と面会。佐伯隆快師の弟さん一家も合流し、賑やかに歓談。ナグプールで佐々井上人そっくりに彫られた必生火天不動明王に、皆で般若心経五巻を奉読する。

6/3 (九日まで中村不在) 岡山で休息。古書店等訪問。

6/4 臨濟宗妙心寺派曹源寺に参拝し、ご住職原田正道師とご面会され、その後少林寺流空手道場である滴水会館を訪問。

6/5 9 新見へ里帰り。佐々井家及び土井家の墓参をされ、自身のルーツについても多くの貴重な示唆・情報を得る。

6/10 (中村合流) 岡山県総社へ移動。吉備国分寺五重塔や数々の古墳を巡る。夜、佐伯隆快師の一心念誦堂にて、奥様心づくしの手料理をご馳走になる。

6/11 倉敷慈命会。先ず一心念誦堂にて、反原発についての懇話会に出席。次いで倉敷駅前にて街頭演説など。雨の中、旗を押し立てて法螺貝を吹き、倉敷美観地

区まで行進。美観地区のお茶屋にて津軽三味線の演奏を聴く。

6/12 車に乗って神戸へ。真言宗実相寺参拝。種智院大学学長を務めた故頼富本宏師の菩提を弔う。それから臨濟宗明泉寺に参拝し、旧知の富士玄峰師を訪問。富士師の案内で、源平合戦、平敦盛、熊谷直実由縁の須磨寺にも参拝。夜、神戸青年仏教徒会の歓迎会に出席。佐々井師の堂々たる演説に拍手喝采。ホテルに戻り、かつて一時期ナグプールと一緒に過ごしていた西村馨氏と再会。お二人とも若かりし頃の豪快なる大活動に思いを馳せ、回想談に花が咲く。

6/13 いよいよ高野山へ。折しも高野山開創千二百年祭に当たり、お山へ続く参拝の車道は綺麗に舗装されている。夕方、ヤブージヤパンの川邊健太郎副社長ご一行の訪問を受け、その後、全日本仏教会前会長である河野大通老師とご会見。

佐々井上人が「また思いっきり殴つてください」とお願いし、河野老師がよしきたと、頭をスパーンとはたくという一幕があった模様である。宿泊は宿坊櫻池院に三泊。講演会にも登壇される、近藤堯寛ご住職様にお世話になった。

6/14 今回の来日の最大の目的であった高野山講演会。詳細は別頁にて。講演

全国行脚概略図

全日程 40 日。

北は釜石・大槌から、西は出雲・下関まで、
その間約 1,200km 強を行ったり来たり。
日本縦断にも匹敵する壮大な旅でした。



成田・東京



岡山



神戸・高野山・京都

6月14日

岡山



山口

広島岡山



東北

東京・横浜

長野



東京・横浜

7月7日



会は大盛況の成功裡につつがなく終えられた。

6/15 引き続き高野山に滞在。山内各所を参拝し、弘法大師の誕生日を祝う青葉祭を見物して回られる。それから龍神村へ向かい、中里介山『大菩薩峠』『龍神の巻』で、机龍之介が潰れた眼を癒したという「曼陀羅の滝」を訪れる。六〇〇メートルある山道を踏破。念願を叶えられた。

6/16 九度山にて真田幸村由縁の地などを訪問、京都へ。立命館大学国際平和ミュージアムにて、写真家山本宗補氏の写真展「戦後はまだ・・・刻まれた加害と被害の記憶」を見学、山本氏自身によるギャラリートークを聞く。その後、古書店にて宮本武蔵を題材とした漫画『バガボンド』を購入、ご満悦であった。

6/17 大秦映画村を散策。その広さにご感嘆の様子であった。その後、古書店で『破天』（南風社版）、のらくろシリーズ等を発見、購入する。岡山へ。

6/18 津山は浄土宗浄土院に参拝。漆間宣隆ご住職様ご一家に再会。次に、宮本武蔵生誕地と言われる大原を訪問。小説『宮本武蔵』で武蔵が吊るされる千年杉のモデルとされる大銀杏のある大聖寺

に参拝。更に、久米郡百々々の真言宗華蔵寺に参拝。阿形国明ご住職様ご一家と旧交を温める。

6/19 曹源寺にて、岡山県同宗連主催研修会に参加、中嶋哲演師の講演を聞き、また同師とお話しなどする。

6/20 山口県岩国市へ。ナグプールにて佐々井師と旧交のある旅行家石本謙爾氏と会う。一緒に白蛇神社を参拝し、

白蛇展示室を見学。お守り等と共に白蛇のぬいぐるみを購入し、お手ずから白蛇大明神と開眼される。このぬいぐるみを肌身離さず丁寧に扱うため、魂魄宿り、何度も本物と間違えた宿屋の女将さん達が驚いて悲鳴を上げることになる。

その後、下関市壇ノ浦に臨む赤間神宮に参拝。安徳天皇由縁の龍宮城をイメージした中国風水天門が異彩を放つ。全国平家会の事務局長を務められる、同宮の大司権禰宜様と面会。ご病身ながら、佐々井師の平家との因縁や、「南天龍宮城であるナグプールに、平家の慰霊碑を建立したい」というお話に、眼を輝かせながら聞き入れられ、「命ある限りは、なすべきことがあるということでしょう」と今後のご協力の有難いお申し出をいただく。秋吉台に立ち寄り、地獄谷の針山のごとき石灰岩柱を見る。萩にて一泊。

6/21 萩から出雲へ。松下村塾、吉田松陰記念館、ホルンフェルス（角石）大断層、日御碕灯台を見学。龍蛇神が祭神であるという出雲国日御碕神社を参拝。お土産物屋で、昔高尾山近郊に住んでいたというご主人夫婦と話し込む。佐々井師も含め、三人は半世紀前に同じ高尾山の近くにいたのだ。夜は立久恵峡の宿に一泊。日本とは思えない位おどろおどろしい、巍々たる岸壁。

6/22 朝から須佐神社に参拝。大杉が神々しい。それから広島県に移動し、三次は鳳源寺に参拝。赤穂浪士の義士堂や、瑤泉院遺髪塔等に回向。その後、佐伯師の母方のご親戚の家を訪ね、桓武平家の流れを汲む家系図と、秘蔵の平家の赤旗、その他資料を見せていただく。続いて佐伯師のご実家である、神石郡の真言宗醍醐派長命密寺に参拝。佐伯師のご父君に当たられる佐伯暢哉ご住職様と再会。今は亡き奥様のお墓に詣でられ、ご回向される。

6/23 長命密寺の隣にある、ころころ学苑どんぐり幼稚園の子供達によるお遊戯、沖繩のエイサーを鑑賞。子供達に語りかける。次に安芸高田市八千代町佐々井の浄土真宗明顕寺に参拝。ご住職様夫妻と、支援者の宍戸ご夫妻に再会する。それから、同地の佐々井厳島神社に五度

目の参拝に訪れ、浮田宮司様及び氏子の岡山氏と久闊を叙す。かつて宮司様が編纂された資料を見せていただき、佐々井師のルーツ「佐々井人」について貴重な情報を得る。また、普段は拝観の許されない奥殿にて、宗像三女神を祀る小ぶりな古社を拝ませていただく。

6/24 児島高德の生誕地と言われ、修験道の総本山であった児島の五流尊灌院に参拝。また、近代の神仏分離で分かれた熊野神社にも詣で、後鳥羽上皇供養塔などを見て回る。

6/25 倉敷にて、東洋経済オンラインの取材。続いて、支援者の石原氏、藤森氏と一緒に、宇喜多直家由縁の新庄山に登り、また石鉄山に石原氏の曾祖父に当たられる西崎喜代治翁が大正一三年に建立したという御堂に参拝。窓を開け放ち、光と風を通して読経される。夕方、取材一件。翌日は、終日お休みになる。

6/27 坂田龍晴氏の運転にて、古い日本映画のDVDや古書を涉猟。夕方、岡山県議会議員の方々の訪問を受け、また坂田氏と奥様も訪ねて来られる。夜、空手の滴水会館の記念パーティーに出席。

翌日、再び東京へ。

6 / 29 四年前に訪れた被災地の現状を目の当りにすべく、山本宗補氏のご案内で東北へ。新幹線で先ず北上市に入り、

遠野を経て大槌町吉里吉里へ。曹洞宗吉祥寺に参拝し、高橋英悟ご住職様と面会。無縁仏を含む震災犠牲者のために祈りを捧げる。高橋ご住職様と東屋檀家総代様に被災地区を案内してもらい、江岸寺の広大な墓地や長田晴山作の涅槃像に立派な供養塔、(阪神淡路大震災追悼の灯を種火に分火された)「希望の灯り」等に

祈りを捧げられる。釜石に移動。四年前、大きなタンカー船が岸に乗り上げていた釜石製鉄所跡近くの場所を再訪。真っ白な釜石観音も遠望する。また、佐々井師自身、津波避難場所へ登り、市内を見下ろし、往時を偲ぶ。

6 / 30 大船渡市吉浜地区にて、明治三大陸津波の碑を見、気仙沼市越喜来を訪ねる。復興工事を見下ろす高台で、毎日街が変わって行く様子を見に来ているというおばあさんと出会い、会話を交わされた。陸前高田では、土砂を運ぶための巨大なベルトコンベアーの複合体を見る。次いで南三陸町へ。津波で骨組だけになったこの防災庁舎前の祭壇前にて読経回向供養。佐々井師が高野山奥之院で授かったお守りを、慰霊の祭壇のお地藏さんの首にかけ、祈る。折しも、同防災庁舎を取り壊さず保存して行くことを町長

が発表する日で、たまたま防災庁舎前に居合わせた朝日新聞社記者から簡単な取材を受ける。

石巻へ。津波後に発生した火災の被害にあった旧門脇小学校跡を訪ね、慰霊の祭壇に読経供養。続いて東松島市旧野蒜駅近郊を再訪。復興の進まない空き地で祈る。旧駅は津波被害のため今は使われず、他の場所に移転していた。福島県まで移動し、南相馬市のホテルに宿泊。

7 / 1 福島県原発被災地を回る。曹洞宗同慶寺に参拝し、田中徳雲ご住職様と面会。近くを案内していただく。先ず、南相馬市の広大な除染土集積場を見る。除染土が黒い袋に詰められ、膨大な数に及んで広がっている。浪江町請戸港近くの路傍の慰霊所にて、雨の中、読経供養。そこからまた、放射性ゴミ仮焼却炉を間近に見る。福島第一原子力発電所の排気塔等を横目に見つつ、双葉町、大熊町、富岡町を車で走り過ぎる。再び浪江町に入り、希望の牧場に多くの被曝牛を飼い続ける吉沢正巳氏を訪問。震災以来のお話しをうかがう。

7 / 2 午前、毎日新聞社の取材。午後、オンライン・コミュニティ hasuno 新幹線にて上野を経て、宮本龍勝師の車で横濱へ。黒澤雄太氏の居合道場、日本武徳院のお稽古を見学。

ha 主催の講演会・交流会のため、目黒の五百羅漢寺へ。松雲元慶禪師の作になる釈迦牟尼仏と脇侍の両菩薩、そして羅漢達の像が締めくく霊鷲山を模した本堂で、参拝後、各宗の若手僧侶達に講演、それから質問を受け交流する。

7 / 3 4 今回も大変なご支援を受けた織田隆深真成院ご住職様、奥様、副住職様に御礼と別れを告げ、新幹線で軽井沢へ。上田市日蓮宗妙光寺ご住職宮淵泰存様ご夫妻をはじめ、長野県の多くの支援者の皆様の出迎えを受ける。鬼押し出しにて団扇太鼓を手にお題目を唱え、活火山噴火休息祈願を厳修(詳細は別項)。

小山奈々子氏のご両親と叔母様、「かよこ桜」の紙芝居で有名な山梨市ボランティア会「さくら座」代表の古屋由美子氏達の訪問を受け、談笑。祈禱を行う。夕方、新幹線で上野へ。ANA 現役パイロットであり頭本法華宗弘通所法華行者の会主宰の土屋信裕師と会食し、旧交を温める。

7 / 5 大正大学にて、評論家の宮崎哲弥氏と対談。六〇〇人もの聴衆が詰め掛け、大成功を収める。別報告を参照されたい。

り、満場の拍手の中閉会する。取材の後、横浜にお弟子の高山龍智師を訪問。お母様の御遺影に向かい、懇ろなご回向を手向けられる。そこから登嶋巖信師と合流し、多宝仏塔と如意宝珠と法華経についての高説を聞く。佐々井師、大変重要な示唆を得た由。夕刻、『女性自身』誌の取材。

その後、弟子や支援者で佐々井師を囲み夕食。日本滞在中最後の夜を過ごす。

7 / 7 成田空港にて、弟子、支援者の見送る中、同行の小林三旅氏と共に、快活且つ健康に、再びインドの地へと飛び立って行かれた。

佐々井師のこの度の帰国は、最初から最後まで多忙ながらも、健康を回復され、多くの有縁の方々との再会、また新たな縁を結んだ有意義なものであった。また、最重要目的であった高野山講演会と大正大学での対談の両方とも、大成功の裡に幕を閉じることができた。佐々井バナーンテージ、まことにありがとうございました。これからもどうぞ健康に、インドの仏教徒やわれら日本の衆生を導き、ブッダガヤ大菩提寺の奪還裁判や、南天鉄塔や真言密教由縁の遺跡の発掘・調査等に邁進してくださいませ。そして、どうか来年もまたお元気に、日本へ帰って来てください。



6月14日

高野山講演

文||田中秀康

この日、高野山大学黎明館松下講堂にて行われた「アンベードカル博士銅像建立奉賛・佐々井秀嶺 高野山講演」の様子をお伝えできればと思います。

今回の講演はインド仏教を再興したアンベードカル博士の銅像建立記念として企画されたもので、この機に最も相応しい人物として佐々井秀嶺上人が招待されました。

著名ジャーナリストの Twitter や有名サイトなどのネットメディアで取り上げられ、決してアクセスの良い場所ではないにもかかわらず、当日は四〇〇名は下らない数の方が聴講に足を運び、また当日の様子がニコニコ動画でも中継されることとなり、述べ六万人を超える視聴者数を記録しました。

アンベードカル博士像へ
 献花、五戒文読経
 マハーラシストラ州知事訪日と像建立

はあいにく延期となりましたが、上人はそんなことは物ともしない様子で、雨上がりの曇った空の下、肖像画への献花と読経を行ないました。読経には上人のお弟子の一人である高山龍智師とともに在日インド人仏教徒の方々も同席され、厳粛な雰囲気の中行われました。

上人は朝に面会させて頂いた際に「体調が悪い」という言葉漏らされていましたが、いざ式典に臨まれ読経に入られると、その声には力強さがこもっているのは流石でいらっしゃいました。

そして献花の後、いよいよ、今回のメインイベントが始まりました。

第一部 私観南天鉄塔

上人はまず壇上に立ち、この度の招待に感謝と恐縮の意を述べられ、南天鉄塔について、上人独自によるこれまでの調査と発掘の経緯を語り始めました。この「南天鉄塔」については諸説あるため詳細は省きますが、かつて南天竺に存在し、大乘仏教の発祥に大きく関わったとされる、仏教の歴史の中でも重要な意味を持つ鉄の仏塔のことです。

上人は開口一番から力強い語り口で、なぜ南天鉄塔がナグプールに埋蔵されて

いるという見解に至ったのかを話されました。

上人の語り口は「佐々井節」と名づけてもいいくらい独特な抑揚で、人を惹きつける魅力があります。私はネット上の動画で上人の過去の講演を拝聴したことがありましたが、生で拝聴するのは初めてでした。どうやら長旅のお疲れもあつてか、少し難解な部分もありましたが、ニコニコ動画視聴者が数万人と多かったというところが、いかに聞く者の心を捉えているかという証左だと深く感じました。

上人は壇上に上がったときから一向に座る様子もなく、一時間以上立ちっぱなしで講義を行われました。その姿からは旅のお疲れなど感じさせない気迫がありました。

笑い話になりますが、大変だったのは上人とともに壇上に上がった中村龍海さん。上人につられてタイミングを逸したのか、彼もまた終始立ちっぱなしとならざるを得なかったのはご愛敬でしたが、最後の補足説明が理路整然としていて、ニコニコ動画でも「分かりやすい」という好評のコメントが目立ちました。このような流れもあつてニコニコ動画上では中村さんも大人気となっております。

なお、今回の公演内容と関連のある著書『龍樹と龍猛と菩提達磨の源流』は、「佐々井節」によって語られた生の言葉を書き起こした、佐々井上人の私観を理解

できる貴重な資料だと思います。是非手にとって頂きたい一冊です。

第二部 アンベードカル博士と現代インドの仏教徒

休憩を挟んで始まった第二部。

当日は各方面でご活躍されている研究者の方々の講演もございましたが、それらについては各氏それぞれの活動報告にお任せし、今回は佐々井上人の当日の様子についてお伝えできればと思います。

開始早々、急に沸点が上がったかのように『日本の仏教は駄目!!』という一喝から始まり、宗派を分けて活動するのはなく、統一していこうという方向性を強く打ち出されました。

また、アンベードカル博士の存在と功績が日本では知られていないことを憤って居られる様子でした。かつてアンベードカル博士の支持者はインドの中でも一部の方達にとどまっていたようですが、今やインド全土を越え、世界で称えられているのに、と嘆いて居られました。

第三部 『インド仏教の最高指者』

高野山から生中継

最後はニコニコ動画の視聴者からの質問に答える第3部。

相変わらずの「佐々井節」で、真摯に悩みに答えていらっしゃいました。

まず、ニートの男性からの「どうすれば現状を変えられるか」という問いかけ



に対し、上人のお答えは「外に出て歩く」というもの。

さらに、「恋人がほしい」という男性からの質問には、まずは声をかけてお茶をしたらいというご回答をされていきました。また、上人は自身の過去の経験から「恋とは苦しいものだ」とも。上人は色恋沙汰に事欠かない人生を歩まれてきたようで、そういった経験からか、このような言葉が出てきていたようでした。

上人の恋愛に苦悶した経験はすでに『必生 闘う仏教』や『破天』などの著作に描かれているので、是非手にとって頂ければ幸いです。

最後に鬱を患った女性からの質問には、次のようなアドバイスが。

「歩く。」

総括すると「外に出て歩き、すれ違う人と挨拶を交わし、お茶を飲みながらお

話をする。これが人生に迷った時の処方箋だ」と上人はアドバイスされていきました。

なんだかユーモラスにも聞こえましたが、上人自身も人生に苦悶し、実践の中で生きてこられたからこそそのアドバイスなのだと思われました。そして、その気になれば今すぐ取り組めるところがまた上人のアドバイスの素晴らしいところだったのではないのでしょうか。

閉演

講演終了後は会場に来てくださった方達と一緒に写真を撮られたり、談笑したりと交流され、良い雰囲気のまま、終演となりました。

朝から夕刻までと長時間の講演でしたが、疲れた様子も見せることなく、講演をやり遂げられた齢八十の上人に感嘆してしまいました。

また、ニコニコ生放送を通じてさらに多くの方にも佐々井秀嶺という存在とこれまでの功績を認知されたことが、今後、上人の支持・支援の和が広がる布石になつてくれることを期待いたしました。

佐々井秀嶺上人

信州道中記

7月3〜4日



文・写真 妙光寺 宮淵泰存

は、天明三年七月八日（新暦一七八三年八月五日）の浅間山大噴火の二三三回忌に当たります。併せて慰霊供養を行うことに。

まず鬼押出し園に行きました。ここは、浅間山大噴火により流出した溶岩流の名残で、奇岩が見られます。園内には浅間山観音堂、天明爆発供養塔があります。目指す供養塔は入り口から約二キロ、かなり坂道を上ります。佐々井上人は歩いていくといわれたのですが、中村龍海さんが車椅子を押して登りはじめました。途中雨も強くなり、また浅間山も雲に覆われて見えないので、観音堂の見えるカーブで、団扇太鼓を打って南無妙法蓮華経のお題目を唱え、物故者の慰霊供養を致し、また浅間山の方向に向かってお題目を唱え活火山噴火休息を祈りました。次にそこから車で十五分程の所にある鎌原観音堂に行きました。

七月三日、佐々井秀嶺上人を軽井沢駅にお迎えしました。小林三旅氏、中村龍海氏も同行して来られました。山本宗補氏は奥様とご一緒に参加されました。佐々井上人は昨年死ぬ程の大病をされたとはとても思えないお元気そうな足取りです。またこうして信州を訪れ下されるとうれしい限りです。

ところで本年六月十一日、浅間山の噴火警戒レベルが2に引き上げられました。そこで佐々井秀嶺上人をお招きして、活火山噴火休息祈願を計画しました。本年

鎌原村は天明三年浅間山大噴火のとき、土石なだれによって流されてしまいました。この観音堂は、丘の上にあつたため残ったもので、当時五十段あつた石段は、土石なだれにより十五段しか地上に現れていません。爆発と同時にここへ難をのがれて助かった村人は、当時住んでいた五七〇人の内、わずか九十三人だつたといわれています。この観音堂に避難した村人が生き残つたこともあり、村人を守つた奇跡の地として知られています。今でも当

時の建物のまま大切に保存されています。ここで塔婆・御札・花・お供物を供え、天明三年七月八日浅間山大噴火被災横死の諸精霊の二三回忌の追善供養を行いました。皆でパーリー語で礼拝文・三帰依文・五戒文を唱え、団扇太鼓でお題目を唱え、御回向致しました。併せて平成二十六年九月二十七日、御嶽山噴火被災横死の諸精霊の新盆会の追善供養も祈りました。地元の軽井沢妙順寺古屋野順友上人、佐久市立正寺浅川寛祥上人にもご列席いただきました。

ここにたまたま来られたおばあさんが、インドから来られた高僧佐々井秀嶺に出会えたことを大変感激され記念撮影。一期一会ですね。

地元の奉仕会の皆様から心暖かいお茶や漬物などのふるまいを受けました。先人の被災の記憶を風化させず、防災に取り組み、自他共に安穏な暮らしができるよう心がける決意を新たに致しました。

隣接する「そばうどん 水車」で少し遅い昼食。佐々井上人がそばが大好きで良かった。ここには「パン工房六角堂」というとてもおいしいパン屋さんがあり、そのあんパンが天下一品とお話すると、佐々井上人は「あんパンが大好きだ」とおっしゃり昼食後でしたが早速「これはうまい」と言ってお話してしまいました。その後、浅間火山博物館で資料購入し、小諸に向かいました。



車の中で、私が「御代田町には龍の道の伝説がある」とお話ししたことから、急遽その場所に行くことになりました。その場所とは、「真楽寺 大沼の池 甲賀三郎伝説」で、なんと山本宗補さんの菩提寺でありました。雨上がりの午後、大沼は木漏れ日の中龍頭と宝珠が浮かび上がり幻想的な輝きを発していました。佐々井上人は大沼の池の湧水を口に含みその霊気を取り込んだかのように見えませんでした。

後で気がついたのですが、この真楽寺は奈良時代に浅間山噴火沈静の祈禱所として建立された古刹で、今日の御祈願に是非とも立ち寄るべき所だったのでした。

甲賀三郎伝説

浅間山の麓に住んでいた甲賀三郎は兄二人に騙され蓼科山の深い穴へと落とされてしまいました。地底をさまよって歩いた三郎は一筋の光を見つけ懐かしい地上へと頭を出しました。そこが真楽寺の大沼の池です。自分の姿を水面に映すと龍にと変わったていました。龍に変わった三郎は愛する妻を探していました。一方三郎の妻も三郎を探し求め諏訪湖に身を投じて龍になっていたのでした。それを知った三郎は喜び勇んで諏訪湖に行き妻と巡り合って湖の中で仲睦まじく暮らしました。

(御代田町の観光ガイド引用)

その後、小諸城址懐古園に行きました。時間もあまりなかったので佐々井上人は人力車に乗って城址内を一回り。戻ってきたときはなぜか少し涙ぐんでいました。車に乗ると「小諸駅の前を回ってくれ」と仰る。何か女性との思い出の地なのでしょうが。

上田市に到着したのは午後六時。そのまま上田温泉ホテル祥園に入り佐々井秀嶺上人歓迎会。この日は、ホテルで月に一度のイベント開催の日で、「真田幸村 信州上田おもてなし武将隊」の

ショーがありました。佐々井上人も一緒にショーの中に。

七月四日は、上田城跡公園を観光ボランティアガイドに案内してもらい、真田信之の正室小松姫の墓と、仙石家の霊廟も参拝。戦国武将に詳しい佐々井上人に驚かされるばかりです。

その後、当山妙光寺にお越し頂きました。広島城浅野家より上田城仙石家に、敵島弁財天をご捧持された亀姫様にちなんで、製作された白亀様をなでて神力増進していただきました。「白亀は毛宝が恩を報ず」という中国の故事に由来しています。また昨年建立した永代供養塔「霊鷲山」にも入魂のお題目を唱えていただきました。



妙光寺檀徒の皆さんにはそれぞれの都合のつく時間にご参加を頂き、また佐々井秀嶺上人に是非お会いしたいと遠方より三組の方々が訪ねてこられ賑やかなひとときを過ごしました。

7月5日

来日特別公開対談

佐々井秀嶺×宮崎哲弥

『仏教者の使命と救済』
於大正大学

文 山本昌子

評論家の宮崎哲弥氏は、自他共に認める仏教者であり、仏教についての著作も多数お持ちで、佐々井師との対談も以前に経験していらつしやいます。この対談のために、雨天にも関わらず大勢の方が詰め掛けて下さいました。

この度のイベントの裏側で支えの中心となり、盛り上げて下さったスタッフの山本昌子さんに、この一日を振り返っての思いを綴って頂きました。

なお、対談内容につきましては、紙面に於きましては非公開とさせて頂き、紙面を承下下さい。(編集部)

七月五日(日)、梅雨の小雨が晴れることを願いながら、JR板橋駅から大正大学へ向かった。数日前に、フェイスブックの佐々井秀嶺資料室にメッセージを送信し、「何かお手伝いできることありませんか？」と問い合わせ、午前の準備に参加することになったのだ。初めて訪れる場所、初めて会う人たち、自分が何をするようになるのかまだ分からない：



そんな緊張と期待が入り混じった朝だった。

対談会場の礼拝堂は、正門をくぐって銀杏並木の向こうにあった。礼拝堂のドアを開けると大きな『求法高僧東帰図』(平山郁夫原画)に衝撃を受けて見入ってしまった。天竺求法の旅から中国へ東に向って帰る砂漠に行く集団の僧たちの姿を描いたものだという。うつむき加減で足を引きずるような姿は、集団でありながら孤独を強烈に感じさせるものだった。

この日の役割は関連書籍の販売となった。六月に発売されたばかりの『龍樹と

龍猛と菩提達磨の源流』や人気の『破天』だけでなく、一九九三年発行の『夜明けへの道』(岡本文良著)が準備されていた。これは南天会のスタッフが発行元の出版社から在庫五〇冊を自費で仕入れてきたものだという。私もこの時初めて手にしたが、第四〇回(一九九四年度)青少年読書感想文全国コンクールで中学生の課題図書に選ばれており、アンバードカル博士の生い立ちから佐々井師のインドでの活動までが易しく書かれている。インドでの仏教を語る際にカースト差別の説明は避けて通ることが出来ないため、若者に推薦するのにぴったりと思われた。再び注目されて増刷が叶う

ことを願う。

さて、私が佐々井師を知るようになったきっかけは、山際素男さんのインドに関するさまざまな著書だった。その中に『破天』があった。その後、二〇〇九年六月に佐々井師が四十五年ぶりに帰国して講義演説はあと二回しかない、という情報が耳に入った。なぜだかこの機会を逃してはいけないような気持ちに駆られて、龍谷大学での講演会へと新幹線に乗った。「私たちに何が出来るでしょうか？」という質問をしたところ、「一度ナグプールに来てみるというですよ」と会場の皆さんに呼び掛けられたので、またしてもなぜだか行かねばならないような気がして九月には一週間の休みを取ってナグプールに飛んだのだ。ナグプールを訪れることで、四〇度を超える灼熱、既婚女性たち、若者たち、インドの発展、格差など身をもって感じる事ができた。また、佐々井師の元を訪れる日本人たちとの出会いや別れも経験した。何度も訪印できる自分が幸運であることを感謝し、自分に出来ることを模索し続けている。

大正大学での対談のお手伝いでもさまざまな人たちとの縁が生まれた。それぞれが佐々井師に何かを感じて行動を起こしている。各人の話を聞いて感心するこ



撮影：山本宗輔



撮影：山本宗補

とばかりだ。無知で独り善がりな私は、誰か日本人がナグプールに移り住んで佐々井師をお助けしなければ！貯金がない！と息巻いていた時があった。しかし、それぞれが得意なこと、出来ることを無欲で行動に表すことが肝心なのだと今では考えている。

佐々井秀嶺師という稀有な人物との出会いは、それぞれの人生に大なり小なりの影響を与えずにはいられない。だから私は出会いのチャンスを逃がさないのだ。「ねえ、スゴい人がいるのよ。ちょっと（本を）読んでみない？」と。

7月1日 オレの師匠

日本武徳院試斬居合道
師範・剣士 黒澤雄太

一億人とも言われるインド仏教の最高指導者である佐々井秀嶺師が、ついに我が道場にあらわれた。

まさに嵐のように出現したという感じで、道場に入ってくるなり、上座におわす毘沙門天さんに「般若心経」をとなえ、その場を一瞬にしてバンテージ独特の異空間にかえた。

バンテージとは、インド仏教という師の尊称で、佐々井秀嶺師のことをインド仏教徒は親愛をこめてそう呼ぶ。

バンテージと私は師弟関係で、もともと四十五年ぶりの帰国の際にバンテージの前で奉納演武をしたのがご縁のはじまりだ。

その時に「あなたの剣を持つ姿から、龍が雲に登って駆け抜けていくさまが見えた。よって龍雲という法名を授けよう」とおっしゃり、有難い名前をいただいた。その御礼もかねて、バンテージがインドの本拠地ナグプールに建立した龍樹菩薩大寺へ壱剣を奉納するため、道場の有志とともに訪れた。

その後も、刀好きのバンテージのために正宗、貞宗、村正の刀を見ていただきたい、友人の刀鍛冶の好意で、刀作りを

体験していただいたりした。

去年の夏、バンテージが危篤状態になったとの知らせを聞き、大変心配したが、やはりまだ大きな役目が残っているのだろう、すつかりお元氣になられ、今回の一時帰国となった。

お元氣になられたと言っても、今年八十歳で、短期間とはいえ、危篤状態になったわけだから、どこまで体調や氣が復活しておられるのか、正直心配ではあった。

しかし、それはうれしいことに杞憂に終わった。

バンテージの氣と、道場の氣がまざりあつて、得難い特別な時間となった。

この時間は私にとって、多くの教えとその実践を示し、背中を押し、底を抜く覺悟を迫るものだった。



かつて、山岡鉄舟の弟子であった小倉鉄樹は師のことを敬意をこめて「おれの師匠」と呼んだ。

その故事にならつて、私もバンテージのことをこう呼ぼう。「オレの師匠」。

※日本武徳院ブログ「道場バンザイ」より許可を得て転載させて頂きました。(編集部)

シルプルより。

インド・シルプル在住
平野文興(大頭龍興)

7/18 曇時々雨 《インドへ再入国》

直通であれば九〜十時間でデリーへ着くところ、私は格安航空券の為に、デリーまで約十六時間。デリー空港で国内航空出発まで約七時間待つて、搭乗後も、出発まで機内で一・五時間。ようやく離陸。

日本から凡そ一日かかってライプフルに到着。出迎えて下さったナンディシュワル夫婦を大分お待たせしてしまい、そこから車で三時間。結局、日本から凡そ一日半がかりでライプフルに到着。ようやく懐かしのお寺に戻ってきたところ。

インドは丁度雨季に入ったようで、一時の死者の出たという殺人熱波は過ぎ、雲が垂れ込め、雨が時にザザザっと、

時にシトシトと降ってます。日本は丁度梅雨が明けたようで、暑さが増しているようですが、こちらはすずしいです。

凡そ五ヶ月ぶりに戻ったお寺は案の定、蜘蛛の巣が張り、埃だらけで、ヤモリの糞がたくさん落ちていました。

シルプルは、寺周辺の田んぼでは折しも田植えが始まり、お寺の屋上から見える景色は、ここを出た時は乾季の時の埃っぽい黄土色だったのですが、今は雨で樹々も埃が落ち、草が伸びて、あたり一面黄緑色に塗り替えられ、田んぼの中では色とりどりのサリイをつけた女性たちが十五、六人列になり、時折降ってくる雨の中、腰をかがめて苗を植えています。眺めているぶんには、一面薄緑色のなか、青、黄色、紫、ピンク、赤、緑、など、色とりどりが動いて綺麗なのですが、あのサリイをつけたままでは作業しにくいのでは？ などと他人事ながら思ってしまった。

五ヶ月前ここを出る時、産まれて一ヶ月くらいの全身茶色い子犬がウロウロしていたのですが、結構大きくなっていて、寺に入った私にさかんに吠え、威嚇してうるさかったのですが、餌を与えたら急になついてしまいました。余程お腹が空いていたのでしょう。でもその食べ方は、おすおすしながらにじり寄ってきて

て、時々私を上目遣いで見ながら、ガツガツしてました。

野良犬同士の喧嘩の怪我か？ 病気か？

腰のあたりの毛が広く抜けていて、肌がピンク色に現れています。痛いのか、痒いのか、ときどきペロペロ舐めてます。スタイルも毛なみも良いとは言えないし、顔つきも何時も何かに怯えているような目をしていて、かわいそうな気がします。最初は頭を撫でるのもためらいました。

このお寺で飼う事ができれば、私の慰みになって良いが……と思ってます。

もともと、初めて来た頃、庭に大きな野良牛が入って来たのにはびっくりしました。出て行った後には、土産物が四個ほど置いてありました。地元の人達がやる様に、さすがに素手でつかんで、干して燃料には出来ませんでした。

野良牛は子牛であつても飼えませんです。

真っ黒顔で、尾っぽの長い猿の集団も、子連れで十頭位、時折やって来ます。

寺の道路側に植えてあるアショカツリーの高いところを飛び回ってます。空中を飛ぶ時、赤ちゃんざるは、よくもまあ落ちずにしっかり掴まっているものだ！ と感心して見えます。

木から降りてきて、据えてある水のタンクのふたを開けて飲んでいたり、私のサンダルを持って行ったり、隣の家の

せつかく育った作物をムシヤムシヤやっています。村人に至るところで追い回されています。

子猿だったら、飼いたいと思います。

7/22 曇

《佐々井上人来訪》

佐々井上人が今日、ナンディシユワル夫婦と来られ、日本でお会いした時よりさらにお元気な様子です。パワフルです。日本での思い出話など楽しくお聞きしました。わざわざ遠路はるばるナグプールから来て下さいましたので、多分、十時間くらいはかかったのでは？ と思われまふ。そのお気持ちにはただただ、感謝するのみです。

その時の雑談の中で、私の歯科技工士の資格を活かせないでしょうか？ できる事なら、このお寺で入れ歯作りが出来れば……と上人に申し上げたところ、それは良い事だ。多くの人が入れ歯で困っている。だけど、シルプルはみんな金はないぞ！ とのお話でしたが、無い人からは、貰えませんか、もちろんボランティアで、です。とお応えしました。

毎年この寺の庭で、ライプールという街などから、お医者様が四、五人来られ、村の人たちに無料の診療所を開設しているの、それを機会に歯医者さんとコン

タクトをとって、なんとか住民の方々の役に立てれば、これもまた、【シルプルでの仏教復興活動】に繋がられるのではと思っています。

そのためには、クリアすべき問題が数多くあるとは思いますが、なんとか実現したいものです。

以上。ではまた。シルプルより。

『龍族』では、会員様各位からの寄稿を随時受け付けております。

冬頃にお届けとなる予定の次号『龍族』5号に向けて、佐々井上人に対する思い、研究の成果など、皆様からの自由な投稿を受け付けております。

特にその間、インドでは「大改宗式」も行われます。もしインドへ行かれて人々の熱気渦巻く様子を目の当たりにされましたら、その興奮をぜひ一筆したためて事務局までお送り下さい。写真や、現地の新聞記事などの素材も併せてお送り下さると、よりインパクトのある記事となります。

※原稿は事務局宛にメールまたは郵送でお送り下さい。

また、原稿料等はお支払い致し兼ねますので、予めご了承下さい。

第 2 回 南天会交流会 講演

「現代インドを生きる仏教僧 佐々井秀嶺と

仏教徒たちの取り組み」

筑波大学人文社会系助教 根本達 ねもと たつし

平成 26 年 12 月 6 日 於 東京 真成院

私は二〇〇一年からナグブルを訪問し、トータルで二年間ほど現地に滞在して調査をしてきました。人類学的な見地から佐々井秀嶺さんと仏教徒たちの活動について研究しています。

現代とはどういう時代か

近代は前期近代と後期近代に分けることができ、今の時代は後期近代という状況にあると考えられています。前期近代とは科学技術の発展にともなう人間の生活がどんどん向上していくと考えられた時代のこと、それに対し後期近代とは科学技術の発展が必ずしも人間の生活向上につながらない状況、そういう時代が後期近代と呼ばれています。日本では一九九〇年代以降に後期近代に入ったとも言われますが、特に二〇一一年の大震災そして原子力発電所の事故以降その状況がはっきりとしてきました。それまでは高速道路を作ったり、トンネルを作ったりしていけばどんどん豊かになり何も問題がなくなると思っていたのですが、実は高速道路も老朽化していきいつかは崩れてしまう、そうした危険性が実

はあるということを知らないままに作っていたんですね。それは原子炉もそうですし建築物もそうです。このように科学技術が発達しても難しい問題を抱えている、そういう時代の中を私たちは生きています。

この後期近代社会において、我々はどういう生き方をすれば未来につながっていくのかということ、佐々井秀嶺さんの活動を通して考えていきたい、それが私の研究テーマの一つです。日本で生まれた佐々井さんは、もともと「不可触民」から仏教に改宗したナグブルの人々による運動の当事者ではありませんでした。その非当事者がどうして当事者になっていったのか。そこに介入する思想というものが、科学技術による発展を追い求めてきた近代的な考え方とは違う何かを示していると考えます。

差別とは何か

次に理論的背景として差別というのはなんなのか、というお話をしたいと思います。一般的には差別をなくすためには教育をあたえたり、経済的な援助をしたりして、偏見をなくしていくことが大切であると考



偏見ですが、この偏見をなくせば差別はなくなるのではないかと考え、教育を施したり経済的援助をしたりします。しかしまた別の理由をつくって「白人」と「黒人」を分け、別々の存在だとしてしまう。

もう一つの問題は人々が「黒人は暴力的だ」という偏見を持ったとします。そのときに、何が起きるかという、その暴力的であるとされる人たちが自分たちは暴力的ではないということを証明しなくてはならなくなる。問題なのは差別をする側であるのに、差別をされる側がそれ対して、違いますよと言わなくてははいけません。なぜ

えられていますが、差別論と呼ばれる研究のなかでは偏見をなくしても差別はなくなる、と言われます。差別論では「あなたとは私と違う人である」と排除すること、その行為が差別であると考えます。今、アメリカでは人種差別に対する抗議運動（昨年八月、米ミズーリ州で少年を射殺した警官への無罪判決に対する抗議運動）が起っています。このことを事例に話してみます。たとえば「黒人」と呼ばれる人たちは暴力的だと考えられたりする。それが差別される側がそんなことを言わなくちゃいけないんだってことです。では差別をなくすためにどうすればいいのか。「黒人」と「白人」を別の存在として排除する行動をまず無くさなくてははいけない、と考える必要があります。「白人」と「黒人」が別々で「白人」に対して「黒人」が抗議活動をしていると考

スでは、「ミズーリ州では抗議活動が行われていません」と、最後にキャスターがなんと「言ったか」といって、「今、黒人社会では怒りが渦巻いています」と言ったんです。じゃあ「黒人社会」といってどんな社会なんだろうと思うわけです。実際に抗議活動している人の中には「白人」も「アジア系」と言われる人もいます。なぜかニュースでは「黒人社会が怒っています」というわけです。「白人」と「黒人」が別々の存在であってそこでぶつかりあっているという考え方を自分たちがどうしても持つてしまおう、そういうことに疑いを持つていこうと、差別論の中では言われています。

またこの反差別運動の過程では、アイデンティティ・ポリティクスということが行われます。アイデンティティとは自分がどういう存在かということで、そのアイデンティティが共通する仲間を集めて運動しようとすることを言います。たとえばインドの仏教徒が仏教徒同士で、障害者が障害者同士で、フェミニズム運動などで女性が女性同士で団結していこうという考えがアイデンティティ・ポリティクスという運動の基礎となります。この運動を通じて差別を受けてきた人々は自己の尊厳を回復することができるようになります。

ところが仏教徒が仏教徒だけ、障害者が障害者だけ、女性が女性だけかたまっていくという状況には、実は他の人との連帯が難しくなるという問題が発生します。フェ

ミニズム運動は女性の問題だから女性にまかせておけばいい、障害者の運動も障害者のものなんだから皆さんがんばってください、われわれは見ているだけだというふうになつてしまおう。アイデンティティ・ポリティクスはそういうジレンマを抱えてしまおう。そういう問題をどうやって乗り越えていくのかということがいろいろと論じられてきました。

重要なことの一つはマジヨリティとマイノリティという二元論的思考から離れましょうと。差別をされている人たちの中でもさらに差別をする人が生まれてしまったり、ある場所では差別をする側であっても別の場所では差別をされる側になるということもある、そうした社会の複雑なできごとをみんなで認識していく必要があるのではないかということでした。

インド仏教徒の歩み

これらの事を前提としてインド仏教徒による反差別運動を見ていきたいと思います。

佐々井さんが活動しているのはマハーラーシュトラ州のナーグプル市というところで、そこは一九五六年十月に B・R・アンベードカルを指導者として三十万人以上の「不可触民」が仏教に集団改宗した場所です。ナーグプルは仏教運動の中心地ですが、他宗教の信仰も盛んで、ヒンドゥー教右翼団体の本部があったり、植民地時代からキリスト教の布教が行われていたり、多くの宗教が混在しているような場所となっています。

二〇〇一年の国勢調査によると、ナーグプル県の人口四〇〇万人のうちヒンドゥー教徒が七十五%、仏教徒が十四・四%、イスラム教徒が七・二九%、キリスト教徒が〇・七八%となっています。インドの総人口における仏教徒の割合は同調査で〇・七七%とされていますので、ナーグプル県の一四・四%というのはもの凄いな数です。これだけの数があるというのは、アンベードカル改宗運動があったからというのは言うまでもありません。

インドは二十世紀前半に独立運動が起りましたが、そのときに重要な人物として三人の名前があげられます。一番有名なのはガンディーですね。マハトマー（偉大な魂）・ガンディーとも呼ばれます。もうひとりがジャワハルラール・ネルー、インドの初代首相です。パンディット（学者）と呼ばれます。そしてもうひとりがアンベードカルです。アンベードカルはバーバーサー（父なる指導者）と呼ばれています。だれの父かと言いますと「不可触民の父」となります。

アンベードカルは一八九一年、最も差別を受けている「不可触民」のマハールというカーストに生まれ、自分や親族たちが様々な差別を受けていることを認識します。その後、アメリカとイギリスに留学し、そこで不可触民として差別をされない世界があることを実感したのです。一九二〇年代後半に「不可触民」解放運動を始め、マハー

ドのチャヴダル貯水池解放運動やナーシクのカーラーラム寺院立ち入り運動というのを行います。一九三五年にヒンドゥー教からの改宗を宣言し、一九三六年には『カーストの絶滅』という本を出版します。一九四七年インド独立後、法務大臣に任命され憲法起草委員会の委員長に就任します。現在のインドの憲法には「不可触民」制の廃止が定められています。誰かを「不可触民」と呼んで差別をしていくことを絶対にやってはいけないと憲法に明記しました。もうひとつはカースト差別の禁止です。それぞれ所属する集団が違ってもその間では差別を行ってはいけないということが書かれています。そして一九五六年十月にナーグプル市で仏教に集団改宗。そのときに「二十二の誓い」というのを宣誓します。

しかしその二ヶ月後にアンベードカルは七くなってしまいます。一九五七年にアンベードカルが最後に残した『ブツダとそのダンマ』という本が出版されますが、仏教徒たちの活動は、その生みの親であるアンベードカル博士を失い、停滞してしまいます。この時のことをナーグプルの仏教徒は「空白の十年間」と呼んでいます。その十年後に何があつたか。佐々井秀嶺さんがやって来たのです。以後、再び仏教徒たちの運動は盛り上がっていきました。

アンベードカル教の教え

今の仏教徒たちはアンベードカル教の二冊の

本や「二十二の誓い」を読むことで仏教を学んできました。一九三六年にアンベードカルが記した『カーストの絶滅』。そこでアンベードカルはヒンドゥー教の改革を目指しヒンドゥー教が持つ差別的側面を厳しく批判しています。そして『ブダとそのダンマ』。仏教を「自由、平等、博愛の宗教」として信仰することを説いています。それと「二十二の誓い」は仏教への改宗方法を示したもので、ヒンドゥー教を破棄して仏教に改宗する過程がまとめられています。

一般的にヒンドゥー教徒は神様の方で病気を治し、苦悩をなすという信仰が強いのですが、アンベードカルの教への一つの特徴はそういう神様の超自然的な力は存在しない、そういう信仰の否定があります。仏教徒は「不可触民」として差別されてきたわけですが、平等や科学を重視する仏教に従い差別と闘って乗り越えよう、アンベードカルはそういった意識を仏教徒にもたらしました。

新たな課題

仏教徒たちはアンベードカルの教えにより、自らの被差別経験に基づいて相手の過ちを正し、仏教徒としての社会的地位を勝ち取ってきました。

しかしこの「差別と迷信のヒンドゥー教に対する科学と平等の仏教」という対立構造は、現在いくつかの問題を抱えています。つまり先ほどのアイデンティティ・ポリ

ティクスがかかえている問題と重なるのですが、ヒンドゥー教を否定して仏教を肯定していく運動なので、どうしてもヒンドゥー教を否定するという側面が重要視されてしまふ。そうすると、現地で仏教徒を助けたというヒンドゥー教徒もいるのですが、そういう人たちと連帯できなくなってしまいます。そのような課題が生まれてしまうんです。逆に仏教徒がヒンドゥー教徒を助けることも難しくなっています。

またヒンドゥー教を強く否定するという態度が、仏教徒たちの内部に新たな分裂を生んでいくという状況を生み出しています。

その一例を紹介すると、二〇〇五年のナーグプルにおける改宗記念日を調査したときのことですが、改宗式に集まった群衆の中に、手にカミソリを持って人々の手首に目を向けている仏教徒活動家（アンベードカライトという）がいました。この仏教徒活動家は手首に紐や腕輪を巻いている仏教徒を見つけると、「あなたは仏教徒ですか？ヒンドゥー教徒ですか？」と尋ね、「仏教徒」と答えた場合には、その紐は迷信に基づいた慣習だと説明し、仏教徒であるならば切らなければならないと言って、カミソリを手渡し紐を切らせるということをやっています。この場に集まった多くの仏教徒の中には、群衆の中に隠れたり、手首から紐を外してポケットに入れたりする人、また「これは母親が巻いてくれたものだから」

と切って切ることを拒否する人もいます。これらの人たちは病気や悩みを神様の力でなんとか解決したいと思っていますが、アンベードカライトたちは、ヒンドゥー教を捨てきれない、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」と呼んで批判します。またアンベードカル博士の教えに忠実でない「裏切り者」と呼んだりもします。こういった状況は、差別と闘うはずの仏教徒の内部に新たな差別を生むという矛盾を生み出してしまっています。

佐々井秀嶺の神話的思考

現在の仏教徒たちは、その運動においてこのような課題も抱えているわけです。それを組み合わせてものを作っていきます。その時にネジは使い方が決まっています、ネジとしてしか使われません。それが科学的思考です。神話的思考というのはそれとは別です。これとこれが似ているから一緒に使おうとか、これとこれが近くにあるから一緒に使ってみようとか、そういった考え方が神話的思考と言われます。

現在の仏教徒たちは、その運動においてこのような課題も抱えているわけです。

次の佐々井さんの話をするので皆さんにすぐわかって頂けると思っています。「私はこの頃頃に大病になって、毎日、赤い眼をした蛇の心臓を食べ、牛を煮たスープを飲みました。それで一度死んで生き返りました。その時、心臓は一分か二分は止まっていたのではないでしょうか。蛇の心臓が私の心臓になり、牛のスープが私の体になりました。輪廻転生は普通死んでからするのですが、私は生きたまま輪廻転生しました。仏教には即身成仏というものがありますが、私は生き返った時に龍樹とアンベードカルと三者一体になったのです。蛇の心臓は蛇の中心ですから、龍種族（ナーガ）の首都をさしています。それは仏教が生き返ったナーグブルのことです。そしてナーグブルの周辺の地域は「マヒンジャック」と呼ばれています。それは「水牛（マヒジャ）の国」を意味しています。モヘンジョ・ダロという言葉が伝わってくる間にマヒンジャックと

現在は後期近代と言われ、科学技術への信頼に疑問が生まれている、ということをお話しました。3・11に原子炉が津波に襲われて、人間ではコントロールできなくなりました。科学技術の限界というものに対して、じゃあ科学技術とは別の考え方、どのような考え方があるのか、ということが問われている。その中の一つに人類学者レヴィ・ストロースの神話的思考という考え方があります（一九七六『野生の思考』みすず書房）。

分かります。説明すると、あるもの意味が明確に一つに決まっています、別のものは重ならないというのが科学的思考の特徴の一つです。例えば車を作る時に車の設計図があります。それに合わせて窓があったり、ネジがあったり、エンジンがあったりして、

返ったナーグブルのことです。そしてナーグブルの周辺の地域は「マヒンジャック」と呼ばれています。それは「水牛（マヒジャ）の国」を意味しています。モヘンジョ・ダロという言葉が伝わってくる間にマヒンジャックと牛に関するものが多く出ています。私の心

臓が蛇の心臓で、ナーグブルを指し、私の体が牛のスープできていて、マヒンシャックとびったりあっています。そこで仏教が生き返りました。すべてがびったりとあっているのです」と佐々井さんは説明します。

「このような佐々井さんの言葉の意味ですが、けれども、たとえば「不可触民」への差別はインドの問題だ。私は日本人であってインド人ではない。だから「不可触民」の問題は自分の問題ではない、というのが科学的で合理的な思考です。一方で佐々井さんの思考は日本人とインド人を分けて考えるといった思考ではないんですね。近くにいたり、似ていたりすること、そこが重要視される。ここに書いてあるように「蛇の心臓でできた自分の心臓」と「ナーガ族の首であるナーグブル」、「牛のスープでできた自分の体」と『牛の国』であるナーグブルの周辺地域」、「自分が輪廻転生すること」と「仏教が生き返ること」が類似している。似ていることとか、近くにありということが非常に重要な意味を持つというのが佐々井秀嶺さんの考えの仕方なんです。

それは科学的思考様式とは違う思考様式としてあるということですか。こういう思考様式を持っているからこそ佐々井秀嶺という人は四十何年間、貧しい地域に住んで運動を続けて行くことができていられるんですね。

「私の仏教の基礎は日本での苦悩にありま



いかとも思っています。求道し、どこまでも突っ込んでいきましたが、いくら勉強しても苦悩が出て来ました。日本での苦悩が一番大切であり、これがなければ今の活動はできていません。『不可触民』と呼ばれ迫害されてきた彼らもみな苦悩を持っています。彼らも立派な人間なのです。それを何千年かはわかりませんが、『不可触民』として差別し、奴隷にされてきたわけですね。仏道者とは学問をする者ではなく、口で言うばかりではなく、実践しなければなりません。迫害されている人たちと離れてはいけません。密着してなくては行けない。日本の人たちは離れていて、お金をあげればよいと思っています。お釈迦様

や観音様は遠くにいる人でも泣き声で苦しみが分かりました。深い深い修行をしていくから、どれだけ遠くに離れていても分かるのです。心と心が密着し、相手が泣けば自分も泣く、同体大悲と言い、悲しみは慈悲の極みです。悲しみを分かるようにならなければなりません」と佐々井さんは話しています。

心と心が密着する、あの人の苦悩は私の苦悩と似ている。佐々井さんはこういった似ているとか近くにいるということから自分は何をしなくてはいけないかという意味を見出してきました。こういう思考様式を持っています。

佐々井さんは現地で差別に怒って反差別運動をやっている、それはもちろんそうなんです。その根本には何があるのかというと、自分は彼／女らの近くにいる、自分と彼／女らは似ている、そういう思考があります。四十何年間、佐々井さんは現地にいて仏教徒の近くにいます。離れていたら活動はできない、これが佐々井さんの思考の根本にある一つかと思えます。

アンベードカルの運動の継承

まず皆さんが知っているように佐々井さんは反差別運動を率いています。これについてどのように話しているかといいますと、「不可触民、非人間、ハリジャン、新仏教徒と動物以下にさいなまれ、卑下差別され、殺され、辱められ、傷つけられ、瓦石打

擲を受け、食うに米麦なく、着るに衣類なし、住むに家なき極貧民衆」と佐々井さんは記しています（二〇〇四「フツダとそのダンマ」再刊によせて「光文社」）。ここでアンベードカルの教えを学んだ佐々井さんはヒンドゥー教の差別的側面への厳しい批判を展開しています。佐々井さんは自分の仏教を闘争仏教と呼んで弾圧を受けた人々の人間回復、差別からの解放はアンベードカルの仏教でなければできないと言っています。仏教徒としてヒンドゥー教徒と闘うために反差別運動をアンベードカルから引き継いで展開している訳です。そこでは佐々井秀嶺という人とアンベードカルとは重なっている。ただ佐々井秀嶺とアンベードカルの教えというものは必ずしも一致しているわけではありません。そこにはずれているところがあって、そこが実はアンベードカルの運動を更に展開していく上で、重要なものではないかと私は考えています。まず佐々井秀嶺という人は反差別運動をアンベードカルの教えに従って展開している。しかし現在のアンベードカルの運動の中で一つジレンマがあります。経済的に貧しかった人たちが神様の力を求めた時、反差別運動の中でさらに差別をされる人々が生まれるという問題が生じてしまっています。

“わかる”ということ

それでは、その問題を佐々井秀嶺という人はどのように乗り越えているのか。超自

然的な力によって病氣や苦悩を取り除く、そうした力を持つものとして祝福があります。これは現地でアーシールヴァーダと呼ばれています。小林三旅さんの映像をご覧になったかも知れませんが、佐々井さんはアンベードカルの教えでは否定されているかもしれないと話しつつ、人々の頭を叩いて祝福を与えています。

大事なものは何かというと、仏教徒だけでなく、実はジャイナ教徒、ヒンドゥー教徒、キリスト教徒など、他の宗教の人たちも佐々井さんのところに来て、祝福を受けて帰るんです。アンベードカルの教えの中ではヒンドゥー教の否定が前提としてあり、仏教の肯定に繋がっています。佐々井さんも差別を無くそうという場面ではアンベードカルの教えに従い、ヒンドゥー教と闘っているわけです。しかし、そこで留まらないうところの一つの特徴で、差別はあるけれども、相手がヒンドゥー教徒でもキリスト教徒でもジャイナ教徒でも、どんな宗教であってももし病氣などで苦しんでいるのであれば、自分は全ての人を救います、と佐々井さんは言うんです。矛盾しているように聞こえます。佐々井さんは合理的で科学的な論理を大事に持っている人ではないので、どんな宗教の人であっても誰でもいいんです。先ほど話をした神話的思考です。自分の近くにきて、自分と同じ似たような苦しみを抱えているのであれば私はあなたを助けますよ、という訳なんです。アンベードカ

ルの教えを支持する仏教徒活動家が現在かかえているようなジレンマを、佐々井さんは矛盾を否定せず、矛盾を生きながら乗り越えようとしている、ということなんですね。

「頭を振っている人が来て、本当に良くなくて帰って行く。このようなことがなぜ起こるのか。人を良くしてやろうという親身な気持ち。それが彼らに伝わるのではないかと考えています。私は若い頃には何年間も本当に放浪していましたから。日本全国を回ったくらいです。学校に行って勉強しようと思っても、苦悩が湧いてきて、勉強ができません。そういった宗教的試練によって、インドにいななければならないのだと思います。私は学問はできませんでしたが、宗教的な深みを掘り下げることで誰にも負けていないと思います。それが私の本命ですから。宗教人の本領とは、「わかる」ということですかね。全てを深いところまでとことんと突き詰めていく。人の苦しみ分かるからこそ、ということなので、私は無常なんて言葉を簡単に使うことはできません。見ていると苦しんでいるのが分かるから『こっちへ来い。お勤めしてやるから良くなるぞ』と言うのです。すると、次の日には『ちょっと良くなりました』とか、しばらくした後で『調子が良くなりました』なんて言うてくるのです。それが自分の武器であり、持っている力だと思っております。若い頃に何年間も日本全国を放

浪したことが勉強になっているのですね。今になって思えばですが。その時は本当に良かったけれど。私が民衆に頼りにされているのは、苦しみ、悩み、苦悩を汲んでくれる人と思われているからではないでしょうか」と佐々井さんは話しています。

差別即平等、平等即差別

では、最後に佐々井さんはこの矛盾したあり方について、どのように言っているのか。

佐々井秀嶺さんは、差別との闘争をヒンドゥー教徒に対して行うことと、すべての人を助けることの矛盾について、「差別即平等、平等即差別」という言葉で説明しています。

「差別に向かって闘う一方で、本体は平等であると考えています。目に見えるものは差別であり、闘わなければいけません。一方で目に見えないものは平等であるわけです。片方だけを見てはいけません。その両方を見なければいけません。差別との闘いも徹底してやらなければいけません。そして平等も徹底的にやらなければいけません。みな仲良く平等に暮らしていくべきなのですが、実生活では差別があり、同じではないわけです。闘わなければならぬ。差別の立場から喧嘩をしなければならぬ。他方、差別と闘うが人間は実は平等であるわけです」と佐々井さんは言っています。このように佐々井秀嶺という人は、差別と平等という矛盾する二つのことを同時に

生きようとしています。もともと世界は矛盾していて、この矛盾する世界は科学だけでは説明できない。それを自分ではっきりと認識して差別とも闘うし、平等も徹底してやるということだと思えます。

差別と闘うというのは、平等が達成されないから差別と闘う、そこで平等は将来達成されるものとしてある。一方で佐々井さんが話すように、現時点で平等であるというのは、将来達成されるのではなくて、今まさにここに平等が実現しているということなんです。だから二つのことは本当に矛盾しているんです。差別がある、そこで闘って将来平等を達成するということが同時に今ここにすでに平等というのが実現されているから宗教の違いにかかわらず全ての人を受け入れていくこと。大事なのは全ての人を受け入れる時に、自分を差別する人も受け入れる。自分をいじめ、自分を苦しめる人も自分と平等であるということ。相手を受け入れる。それはもちろんわれわれが生きて行く中ではとても難しいことですが、それをやるべきだと佐々井秀嶺さんは言っているわけです。そういう矛盾した二つのもの、その両者を同時に引き受けようとするのが佐々井秀嶺という人の生き方なのではないか、ということをお話しさせて頂きました。

本文書き起こし

富士玄峰 小林三旅 佐伯隆快

◆南天会佐々井秀嶺師一時帰国2015会計報告(4月1日～7月13日)

収入の部		支出の部		
摘要	金額	項目	詳細	金額
前期繰越金	233,394	交通費	インド日本往復渡航費用(2名分)	199,320
会費(振込以外)	60,000		国内移動(鉄道利用)	98,550
会費・一時帰国支援金(振込分)	1,024,268		タクシー代	25,180
一時帰国支援金(振込以外)	840,000		その他車両関係費用	38,146
5/31交流会 カンパ	25,000		東北巡礼交通費(新幹線・レンタカー利用5名)※	159,610
5/31交流会 書籍売上	69,820		小計	520,806
6/12神戸仏教徒青年会 書籍売上	20,000	宿泊費	サンロード吉備路(2名2泊)	24,360
6/14高野山講演 カンパ	56,362		神戸プラザホテル(2名)	15,854
6/14高野山講演 書籍売上	150,000		高野山櫻池院(上人、招待者他)※	318,000
7/5大正大学対談 カンパ	13,651		花園会館(3名)	23,220
7/5大正大学対談 書籍売上	44,000		萩美城浜荘(4名)※	23,760
その他 書籍売上	146,000		出雲御所覧場(4名)※	24,600
関係者宿泊代交通費等預かり	314,000		東横イン倉敷(2名2泊)	20,136
合計	2,996,495		アークホテル岡山(随行者1名3泊)	34,792
			釜石多田旅館(5名)	39,400
			南相馬丸屋ホテル(5名)※	23,500
		小計	547,622	
		講演等	高野山講演費用(チラシ作製、生花、スタッフ弁当代)	102,360
			高野山講演バスツアー支払	73,820
			大正大学対談費用(会場費、スタッフ昼食代)	103,014
			倉敷インタビュー会場費	900
			通信費(各案内、チラシ、書籍発送等)	50,336
		小計	330,430	
		その他	『龍樹と龍猛と菩提達磨』300冊、『日本行脚』3冊	536,400
			上人購入品費(書籍、DVD、杖、掛け軸、カメラ等)	175,997
			上人プリベイド携帯、チャージ料金	26,458
			食事代	13,759
			インドへ荷物発送(9箱)	96,000
			頼富師弔電	3,844
			参拝寺院へ御供え	10,000
			散髪代他	4,397
		合計	2,261,869	

※印の交通費、宿泊費は、随行者関係者からの預り金が含まれております。

宿泊提供

(東京)真成院様

(岡山)長泉寺様(新見)遠山睦子様

高野山講演横断幕・写真パネル提供

佐伯慎亮様

ホームページ更新費用寄付

長谷川晃一様

この他、各訪問先での宿泊、食事、車の提供等、たくさんの方々のご援助ご協力をいただきました。

また南天会世話人の方々には、高野山講演をはじめ交流会、大正大学での対談などで、多くのご協力をいただきました。

皆様のお名前を掲載できませんが、この誌面をお借りして御礼を申し上げます。

ありがとうございました。

滞在支援金振込者 ※順不同敬称略

赤木宥子 赤坂隆証 朝倉誠 石川上 岩佐澄隆 漆間宣隆 岡本佳子 小川正子

岸越秀任 栗林直子 小池一郎 小池悠貴衣 小山美津江 坂田暢子 坂田龍晴

佐々木なおみ 穴戸末美 志村智子 進藤千鶴子 関口昌子 関口雄太 関口英弥

関戸咲子 高尾恵子 武田英敬 武山博子 田中徳雲 田中秀康 登嶋巖信

殿元健照 長坂公一 成田信勝 野田尚道 福瀬くに子 富士玄峰 藤原博元

古屋由美子 増田行治 榊野金治郎 松本喜裕 宮淵泰存 宮本慶通 柳父淑子

山本和邦 吉村拓三 和田美也子

以上は滞在支援金の振込のあった方のお名前です。

直接供養された方、佐々井上人へお布施された方のお名前は掲載いたしておりません。

◆南天会現況（平成二十七年八月三十日現在）

正式会員数 九十三名

賛同人（五十音順・敬称略）

岩佐澄隆（仏国土をつくろう会会長）

漆間宣隆（浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長）

奥平心月（釣月庵庵主）

織田隆深（高野山真言宗真成院住職・密門会会長）

黒澤雄太（剣士・日本武徳院師範）

小池一郎（株式会社マクシス・シンター常務取締役）

島影 透（株式会社サンガ社長）

高山龍智（佐々井上人お弟子）

土屋信裕（顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰）

富士玄峰（臨済宗・元ナグプール同友会世話人）

宮淵泰存（日蓮宗妙光寺住職・長野県修法師会会長）

宮本光研（真言宗御室派元執行）

宮本龍勝（佐々井上人お弟子）

山本宗補（フォトジャーナリスト）

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人と

し、お名前を公表させて頂いております。

賛同頂ける方は是非お申し出ください。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人と

し、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽

にご参加ください。

南天会のご周知・ご吹聴に
ご協力ください

事務局不如意のため、入会者数が未だ少ない状況です。是非ご周知ご吹聴の程よろしくお願い致します。

交流会・イベントなどにも、是非お誘い合わせの上お越し下さい。

パンフレットなど必要な方は事務局までお知らせ下さい。PDF版は南天会ホームページ「南天会について」よりダウンロードできますので、各自印刷の上ご利用下さい。

また、会員数増のためのご提案もお待ちしております。是非ご連絡下さい。



日本一時帰国から現在までの
主な掲載メディア

◆週刊仏教タイムス 5/28 付『インド・高野山友好 佐々井秀嶺氏が帰国講演 アンバードカル博士シンガも』

◆山陽新聞デジタル 6/11 付『倉敷中央通りなどで脱原発訴え 僧侶の佐々井さんら行進』

◆山陽新聞倉敷版 6/13 付『脱原発を訴えて行進 倉敷の僧侶ら 中央通りなど』

◆山陽新聞 6/14 付『インドで仏教最高指導者 佐々井秀嶺さん（新見出身）一時帰国』

◆高野山時報 7/11 付『佐々井秀嶺師 高野山大学で講演 インドの宗教事情を語る』

◆朝日新聞 7/16 付『日本の仏教、民衆の中にあるか インド仏教の指導者・佐々井秀嶺さん』

◆東洋経済オンライン 7/21 付『インド仏教を率いる日本人僧侶の破天荒人生 一人の仏教徒はなぜ彼を慕うのか』

◆週刊女性自身 8/18・25 合併号『私の 70 年談話 佐々井秀嶺「亡国日本を救うのは、私の愛すべき日本の女性たち、あなたたちです！」』

◆ The Japan Times 8/12 付『Surai Sasai: a Buddhist monk battling the caste dragon』



本 『夜明けへの道』

★第四十回青少年読書感想文
全国コンクール課題図書
岡本文良 作・こさかしげる 画
金の星社 1,300 円＋税
ISBN 978-4-323-01749-5

「なぜ、ぼくたちマハール族だけがいじめられるのだろうか？」インドに生まれた少年ビームは、いつも考えていた。同じインド人でありながら、マハール族の者は人間としてあつかわれぬ。差別にきずつきながらビームは成長し、やがて、しいたげられた大勢の人びとのために立ち上がる。時はながれ、ビームの志を受けつぐことになったのは、ひとりの日本人の青年だった。小学5・6年生から。（「BOOK」データベースより）

佐々井秀嶺上人関連の書籍の中には、書店やインターネットでは手に入りづらくなっているものもございます。

南天会として若干確保しております在庫を**実費にてお分けできる場合**もございますので、南天会事務局までぜひお問い合わせ下さい。

※ご用意なき場合、また品切の際はご容赦下さい。送料はご負担頂きます。

《会員種類と年会費》

支援会員 10,000 円以上/年
 一般会員 5,000 円以上/年
 学生会員 2,000 円以上/年 (大学生まで)

《お振込先》

金融機関名 ゆうちよ銀行
 加入者名 南天会
 口座番号 01380-0-90164
 (払込専用口座)

※ご入会の場合

住所、氏名、連絡先電話番号(メールアドレス)、
 通信欄に会員種類(支援、一般、学生)を記入して、
 会費を送金ください。

会費納入後、確認書類を封書にてお送りいたします。

※領収証が必要な方

通信欄にその由ご記入ください。特にご記入がない場合は、「払込兼受領証」(払込取扱票の半券)を以て領収証に代えさせていただきます。

※入会をご希望の方へ
 この度のご縁を機にご入会をご希望の方は、郵便局備え付けの払込取扱票を用い、左記要領にて年会費のお振込をお願い致します。左記口座への入金確認を以てご入会とさせていただきます。

※納付済の会員様には同封されておりません。

※その他ご支援(特別支援)について
 時期、金額を問わず、随時お受け致しております。左記口座にお振込下さい。ご入会を希望せず、ご支援のみの方は、通信欄に「入会不要」とご記入下さい。

※振込用紙が同封されていた会員様へ
 平成二十七年度分 年会費お振込のご案内
 日頃より南天会の活動へのご理解と多大なるご支援を賜り、衷心より御礼申し上げます。当会では、遠きインドの地において獅子奮迅される佐々井秀嶺上人へ、日本の支援者様各位の温かい志を確実に届けるべく、会費制という形を取らせて頂いております。お預かり致しました会費は、必要額の当会の運営費を除いて、佐々井上人を含む当会関係者が管理するインド国内口座に送金致します。右ご理解頂きました上、同封の振込用紙にて納入下さいますようお願い致します。

龍尾言

◎満面の笑みで成田に着かれたバンテージに安堵した日、高野山に大正大。そして寂しかった帰国の日と、あっという間に楽しい日々は何処へやら。光陰矢の如しと正に実感。
 ◎殆どの仕事をされている佐伯代表から、今号より龍族は東京の有志の編集となりました。玉稿や写真をお寄せ頂きました皆様に衷心御礼申し上げます。不慣れな3人で行き届かぬ事許りですが、何卒ご海容の程お願い申し上げます。
 ◎今号の龍族は、編集のプロの長瀬さんに PC のプロの田中さんとアナログで口先ばかりで名前だけの私。全てにおいてお世話頂いた佐伯さん、三旅さんに感謝。そして陰に日向にお世話頂きました南天会の皆様、本当に有難うございました。(関口)

今号の発行日は、佐々井上人 80 歳の誕生日、そして南天会発足一周年という節目に当たります。このような記念すべき号の編集に携われたことに感謝致します。(長瀬)

僭越ながら高野山講演について執筆させていただきました。当日の様子が少しでも読んでくださる皆様に伝わりましたら幸いです。(田中)

『龍族編集部』 関口雄太、長瀬拓磨、田中秀康

(南天会事務局)

〒710-0004

岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内

TEL/FAX 086-463-9391

佐伯隆快 (090-5304-8955)

小林三旅 (090-4538-2677)

メール nantenkai@gmail.com

URL <http://www.nantenkai.org/>

最新情報は
 Facebook『佐々井秀嶺資料室』
 をご確認ください。



◆高野山大学「アンベードカル博士像除幕式」開催

延期となっていた除幕式が開催される模様です。

日時：9月10日(木) 15:00～16:50

場所：高野山大学 黎明館

詳細は高野山大学の Facebook などをご覧下さい。

◆第4回 南天会交流会のお知らせ

今回は東京での開催です。お誘い合わせの上、挙ってご参加下さいませ。ご入会頂いていない方も歓迎です。

日時：9月27日(日) 14:00～

場所：真成院 しんじょういん 東京都新宿区若葉2-7-8

(東京メトロ四谷三丁目駅または四谷駅下車 徒歩7分)

電話：03-3351-7281

交流会参加費：無料、申込不要

◆インドにて「大改宗式」が開催されます。

今年もナグプールでは、佐々井秀嶺上人が導師を務める「大改宗式」が執り行われ、たくさんの仏教徒が誕生します。これまで実際に行かれた方や、映像でご覧になった方もいらっしゃると思いますが、インド各地から数万もの人が、救いを求めて押し寄せる光景は圧巻の一言です。

日程：10月20、21、22日

※『龍族』は、現地に行かれた方のご寄稿をお待ちしております。写真などもお寄せ下さい。